

欧洲から ニッポンを見る

『トランプ米大統領出現で世界は大きく変わる』

在仏コラムニスト 安部雅延

260

でないことを見せつけたのが、昨年のアメリカの大統領選挙だった。大統領がツイッターで政策についてつぶやいている状況は過去にはありえないことだ。

という新天地に導き、理想の王国を築くことを願つたという考えは、アメリカ人の心の底に生き続けている。まつとうなクリスチヤンは、自分で信仰と政治を完全に分離するのには無理だと考へてゐる。

トトロの世界

界のメディアは、ポジティブな報道をしていない。イスラム教の7カ国との入国制限では、英仏独首脳が批判し、オバマケアの代替案の議会審議入りに失敗し、突然、シリア空軍基地にトマホークを59発も打ち込んだ

に、アメリカ国内のメディアだけでなく、英國営放送、BBCや仏日刊紙、ルモンド、英フイナンシャル・タイムズなど世界の有力メディアもトランプ報道では、ネガティブな論議

議を展開し続けていた

大統領に好意的なメディアは、ほとんど見当たらない。BBCに全幅の信頼を寄せるNHKのスタンスも反トランプ的だ。まるで世界のメディアはトランプが大きな失敗や挫折をするのを待っているかのようだ。

しかし、冷静に考えてみると、政治の世界も外交の世界もコミュニケーションのあり方の劇的変化で、大きな状況は変わりつつある。ソーシャルネットワークなどとメディアの存在は、世界の民主主義政治を根底から変えようとしているからだ。既存メディアへの信頼度は日に日に落ちている。

大統領に好意的なメディアは、ほとんど見当たらない。BBCに全幅の信頼を寄せるNHKのスタンスも反トランプ的だ。まるで世界のメディアはトランプが大きな失敗や挫折をするのを待っているかのようだ。

治の世界も外交の世界もコミュニケーションのあり方の劇的変化で、大きく状況は変わりつつある。ソーシャルネットワークなどネットメディアの存在は、世界の民主主義政治を根底から変えようとしているからだ。既存メディアへの信頼度は日に日に

マスコミへの露出度が高い人々の意見が、一般有権者を代表するもの

そこで、トランプ政権をもう一度冷静に見ておく必要がある。ある意味で日本人が最も読みにくい大統領とも言えるからだ。理由は、トランプが信仰者だということだ。アメリカには政教分離の原則があつても、大統領は聖書に手を置いて宣誓するクリントンは当選すれば、その慣習を辞めると言宣言していた。

そこで、トランプ政権をもう一度、冷静に見ておく必要がある。ある意味で日本人が最も読みにくい大統領、ソニー大学ではキリスト教の価値観で学問を教え、共和党議員のスタッフにも多数送り込んでいる。

「が信仰者だということだ。アメリカには政教分離の原則があつても、大統領は聖書に手を置いて宣誓する。クリントンは当選すれば、その慣習を辞めると宣言していた。キリスト教が内包している価値観に女性だけの会合には絶対に参加しないという。禁欲的なキリスト教徒の価値観は行動も規制する。共和党の大統領候補だったロムニー氏はキルモン教徒だ。彼らは煙草、コーヒーなどの嗜好品も飲まない。

ツブリスビセ読ムナシルメツル

世界の人々にとつてのアメリカは世界最強の経済・軍事大国であるとともに、マクドナルドやコカコーラ、ハリウッド映画に代表される大衆文化とニュース専門ケーブルTVのCNN、アップル、グーグルに代表される

れるIT巨大企業、そして世界の金融市場を動かすウォールストリートとということだろう。

ところが、大量の映画を制作し、

世界中の人々を楽しませているハリウッド映画関係者には、反トランプ、

親クリントンが多い。さらにCNNは昨年の大統領選で、クリントン・

ニュース・ネットワークと揶揄され

るほど、クリントン寄りの報道を繰り返し、ワシントンポストやニュー

ヨーカタイムズもそれに続いている。

トランプ政権が発足し、イスラム教国7カ国の入国制限命令を出した

のに対して、全国的な一時差し止め命令を行つたのは、シアトルの連邦裁判所だった。シアトルはグーグル

やマイクロソフトの本社があり、実際に多様な人種のエリートが働いている。巨大IT系企業エリートはクリ

ントン支持者が圧倒的に多かった。

さらにウォールストリートも同様にトランプを敵視している。ところ

が、世界が知っているパワフルなア

メリカ映画産業やメディア、IT系

大企業、金融機関が支持するクリン

トンは落選し、トランプが当選した。

では、アメリカを代表する企業や

メディア、映画産業、金融機関で働く人々の多くが持つ価値観とは何か。

それは一言で言えば「ベラル」ということだ。逆にトランプ支持層の多くはグローバル化の落ちこぼれで、格差拡大に嫌悪している人々だ。

トランプ政権が発足し、イスラム教国7カ国の入国制限命令を出したのに対して、全国的な一時差し止め命令を行つたのは、シアトルの連邦裁判所だった。シアトルはグーグル

一方、トランプ氏の周辺に多い熱心なキリスト教徒やユダヤ教徒は、禁欲的なはずなのに金儲けに走る

はなぜか。マックス・ウェーバーは

資本主義の出現について面白い分析

をしている。それは宗教改革で登場

したプロテスタンティズムにおいて、

禁欲的に金儲けし、得た金は公的な

ものに使うことで正当化されるとい

う論理だ。

モルモン教では、旧約聖書に書かれて

れている収入の10分の1を神に捧げる

法律を守っている。逆に言えば、

収入が多いほど、神に貢献できると

いうことで、一見相反する金儲けと清貧な信仰という2つの活動を結びつけている。彼らの禁欲的金儲け行為は、脇見をせずに金儲けに集中するということだ。

結果、確かにアメリカは巨万の富を手にした。ピューリタンがヨーロッパから流れ着いて長い歳月が流れ、

アメリカは大きく変化した。しかし、

彼らの血の中に流れる自由、平等、独立心の強さ、正義と公正さの価値

觀はけつして建前だけとは言えない。

トランプ支持派の中には「神がト

ランプを選んだ」と公言する人も少くないほどだ。特に信仰者が重視

する正直さをトランプ氏は持っていないと考えられている。彼は常に支持者の声を気にかけて行動する。

シリアのアサド政権が国際的タブーとされる化学兵器を使用した事に

対して、59発のトマホークを打ち込

み、続いて朝鮮半島に向け軍事的圧力を加えるトランプに対し、保守

派の論客たちは「アメリカが8年間

の夢遊病を終え、本来のアメリカが帰ってきた」と言っている。

トランプは就任当初は、一般市民に向けたミサイルを打ち込むアサド政権に対して、自国で解決する問題だと語っていた。ところが子供がサリンガスで口から泡を吹き、死んでいく姿を見た途端、方針転換した。

その方針転換は、共有できる価値観や利益を守るための国外の戦略的資産の防衛は国益に叶うとするものだ。

つまり、アメリカ本来の外交の基本原則に立ち返ったことを意味している。無論、中国やインドなどの台頭で、アメリカのプレゼンスも大きく変化している。同時にトランプ氏は過去のどの大統領よりも現実的だ。

結果を出すためには方針転換は厭わない。少なくともトランプ出現で、

世界は大きく動き出した。

